

図書館ボランティア「フォーブル」の 2011 年度活動と反省

小野 目依

<はじめに>

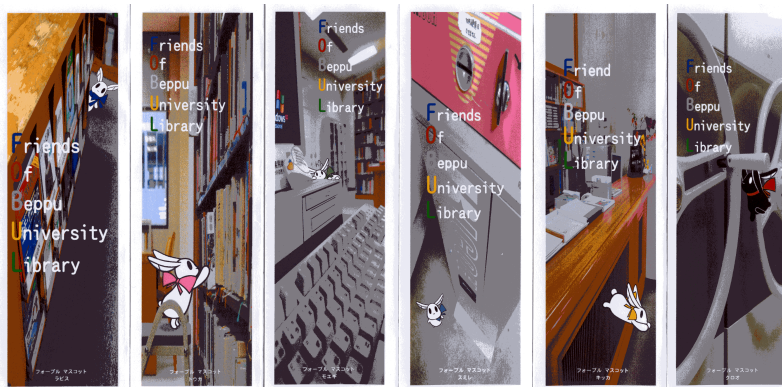
別府大学附属図書館には学生ボランティアのサークルが存在する。図書館での学生スタッフはもとより、ボランティアでの自主的な活動は全国的にもあまり見られないと聞くと、別府大学の図書館友の会「FOBUL」（フォーブル：Friends of Beppu University Library）は 20 年近く前に発足した歴史のあるサークルである。彼らの活動の一端を別府大学内外にも広く知っていただこうと、この場を借りて今年度のフォーブルの活動報告を紹介させて頂く。なお、フォーブルの活動や図書館との関わりについては立花志保氏が寄稿された

「別府大学附属図書館における FOBUL との取り組みについて」（『JUNTO CLUB』第 9 号、2009 年）をご参照していただきたい。

<図書館友の会 FOBUL>

現在フォーブルの部員は司書課程を履修している学生を中心に構成されており、平日 2 ～5 名程度のグループが 1 時間半のボランティアとして図書館業務を行うため来館している。ボランティアは個人としてみると週に 1 回のみの参加だが、司書を目指す学生にとって図書館業務を日常的に行うことは有意義な経験となり得るのではないだろうか。朝から夕方まで詰まった講義の合間を縫って空き時間を調整し、また新入生と 2・3 年の先輩とをバランスよく組み合わせよう配慮されている。

通常作業としては返却図書の排架や書架整理、シール張りなどの装備といった作業が多い。日によって分量が異なるが、前半に排架、後半に装備や書架整理といったパターンが目立つ。作業の全体的な指示は職員が行っているが、細かい手順や時間配分はチームリー



オリジナルしおり 6 種類 図書館カウンターなどで配布している

ダーがそれぞれ判断しており、解決しない場合は職員に相談という連携を取っている。課題としては、1 時間半という限られた時間のなかでいかに効率よく、正確な作業を行うかである。単調な作業が主であるため、個人のスキルやチームワーク毎にどうしても作業のバラつきが出てしまう。

一定以上の水準を保ちつつ、それぞれの得手不得手を見越した指示や仕事の分配も念頭に入れておきたい。また作業がマンネリ化してしまうため、適度に内容を多様化していきたいのだが、配分が難しい。今後はフォーブルからの意見も積極的に取り入れたいと考えている。

フォーブルの図書館外の活動としては、オリジナルしおりや会報の制作、大分県立図書館への見学のほか、部会でおすすめ本を紹介するなどをやっているとのことで、図書館に関わるサークルらしい内容でなかなか興味深い。

＜FOBUL の新たな取り組み＞

・図書館見学ツアー

2011 年度は新たな試みとして、図書館企画である「図書館見学ツアー」をフォーブルにも一部任せることとなった。もともとの発端としては、ボランティアを今以上に能動的に関わってほしいという思いからだったが、一過性のイベントではなく次回に繋がるような、あるいは新しい活動のきっかけになるように進めていくこととなった。



図書館見学ツアーのバス
移動中にて説明中

まず部会にてツアーの実行委員を有志で募り、結果 12 名が選出された。この 12 名でツアーを組み立てていくこととなる。次に見学先の選定について話し合われた。九州の各図書館が候補としてあげられ、移動時間などを考慮した結果、見学先は九州大学中央図書館（箱崎キャンパス）、福岡市総合図書館、福岡市博物館、自由行動先のももち浜周辺の 4 か所となった。それぞれの施設に 2,3 名の担当者を振り分けてチームとし、加えて庶務係の計 5 チームで活動することとなった。事前準備として班ごとに見学先の概説やアクセスマップ・ルート・周辺環境の調査をはじめ、見学日の催し物情報や展示内容、料金などを調査し、報告を行う。庶務係は参加者の募集や学生連絡、説明会の準備や運営など、参加学生への対応を主に請け負った。

ともすると個人作業になりがちではあるが、実際にはお互いの情報交換や細かい連絡のやりとりが必要不可欠となってくる。いわゆる「ほう・れん・そう」を疎かにはできない。しかし各人の都合によって話し合いの出席に差が出るため、対応策として携帯電話で一斉送信される無料のメーリングサイトを活用した。チームでの進行状況を文章で全員に送信することで、それぞれの状況把握や自チームの整理に役立てようと試みたが、お互いの意思疎通や他チームへの興味関心など、活用しようとする意識に個人差が出る結果となった。

ツアー当日は若干のトラブルはあったものの、大きな問題なく無事に終わることができた。バスの移動中に各班から見学先の簡単な説明を行ったが、見学に集中してほしいという思いもあり、見学中の役割分担を決めず主に職員が行った。今後、FOBUL 主体的の企画を行うことがあれば職員のサポートは必要最低限にしたい。

・オープンキャンパス展示

ツアーから 1 週間後、別府大学のオープンキャンパスが行われた。図書館内でも高校生向けの展示を準備する際に、フォーブルの活動紹介と見学ツアーのまとめを掲示するスペースも設けることとなった。展示物はツアーの実行委員だけでなく、フォーブル全体で協力して制作を行ったとのこと。模造紙に書かれたツアーのまとめは写真やイラストを使って説明されており、1 階の掲示板に貼り出された。そのほかにもおすすめ本紹介、しおり配布、活動中の写真スライド上映、オリジナルパーカーの展示など、ひとつひとつ手作りされた親しみのある展示スペースとなっていた。当日は台風襲来という悪天候に見舞われたものの、高校生の来館は多く盛況でフォーブル展示コーナーに足を止めた姿も見受けられた。

館内展示といったツアーのまとめや発表が、短期間で集中してできたのは非常に有意義だと感じられた。また実行委員だけでなくフォーブル全体で一致団結できたことは、日頃からのチームワークが反映された結果だと思われる。ただ実行委員、班のリーダー、部長などがイニシアチブを取って進行していた反面、個人とグループとの接点をどのように連携させるか、ひとりひとり自立して考えていかなければならない。普段、受動的な活動が多い分、能動的・主体的な活動の際は特に必要である。今後の行動に期待が持てる。



図書館見学ツアーの様子をまとめた館内展示



ツアー実行委員を中心に展示物を製作中



オープンキャンパス展示パーカーとボランティア中の写真をパソコンのスライドショーで上映した

・反省会

ツアー終了後すぐに実行委員による反省会が行われた。今後もフォーブルに継続して図書館見学ツアーに関わって欲しいと願っているため、あらかじめ反省会を行う旨は伝えていた。それぞれの反省を聞くと、「委員が団結できてよかった」「学生連絡への対応など慣れない作業も努力できた」など前向きな意見も出る中、「学生募集用ポスターの宣伝期間が短く学生に知らせる術が少なかった」「バス車内での説明がせっかく準備したのにあまり聞こえなかった」などの反省点もでたため、ぜひ来年度以降の課題にしたい。そのほか「授業が詰まっていて参加できる時間が少なかった」という学生も多かったが、自分にできる範囲での手助けを行っていた印象である。

また、自由見学となる博物館班では、「展示会の紹介や入場料金を調べるだけで仕事が終わってしまった」「委員会のメンバーとして役立っていないのではないか」という反省を述べた学生がいた。全体を把握するうえで事前調査は重要な仕事とは位置付けていたが、担当施設がインターネットからの情報で事足りる範囲だったため、事前準備が短時間での終了となったのである。これは企画の担当である筆者の指導に起因する部分が大きく、手の空いた学生をどうフォローするか反省点として残った。

そのほか、「他の班がどれだけ進んでいるか把握できない」という意見も出た。話し合いやメーリングでの報告で小まめに進行状況を伝えてきたつもりではあったが、行き届いていない結果だったようだ。話し合いの回数が多いに越したことは無いが、明確で効率的な方法を考えなければならない。

学生へ仕事を分配する際、どこまでを主体性にまかせるべきかをその時々に応じて判断する必要があり、常に意識していかなければならないことを再認識した。

＜今後の展望＞

漠然とした目標ではあるが、今後は図書館主体ではなくフォーブル主体の活動の場を増やしてほしいと考えている。フォーブルのメンバーから図書館への企画・提案や、ボランティア業務の多様化を求めている。また図書館と学生とをつなぐ懸け橋として、学生連携の役割を担うことを意識していきたい。学生・利用者の目線で図書館を観ることができするため、大学図書館に何が求められているのか、図書の知識以外にも目を向けていく必要があるのではないだろうか。

さらに県内外の図書館学生スタッフとの交流といった横のつながりを広げていきたいと考えている。大学図書館における学生スタッフの運用は全国的に頻繁ではないと言われており、公の統計などを得ることもできなかった。自館以外の学生スタッフがどのような活動を行っているのか興味はあるものの、知る機会もごくわずかである。そこで図書館学生スタッフが交流できる場を設けたいと思い、APU ライブラリーにご相談させていただいた。ご快諾いただいた結果、試験期間ではあるが、今年 2 月にさっそく FOBUL とアジア太平洋大学ライブラリーの LA (Library Assistant) との研修会を執り行う運びとなった。館によって異なる特色や課題などの意見交換を行える交流の場を設けられればと考えているが、どのような会になるか現段階では未知数である。学生・職員ともにより刺激が得られることを期待している。

気ばかり逸るが、フォーブルの今後の行動が大学の内と外の連携を意識してより充実したものになることを願っている。また筆者も大学図書館の一職員として、彼らを指導する立場として、どこまでを具体的に指示し、どこから自主性に委ねるか、日々試行錯誤を問われている。

(おの・めい 別府大学附属図書館)